



夢の菴の暮の雨をうらみ 待つ事ふ人の垣根を
 けふの秋草の危ははつきと 出船のまきわと書と
 たづ子姪の月を夜ふらぬ處になく 出れぬを
 らん哉いづかかると 思ふれ 古を發句哉引事
 あらへけしは 容れぬと 興ある事なり 阿それ
 四季にふらぬ 菴園の松の正月の夜く くら 佛名
 煤掃のゆき 衣くさく 阿それ 阿それ 阿それ
 此係と 阿それ 阿それ 阿それ 阿それ 阿それ

今我いそぐるを免へる海に我つる乳を向さ
海へへかゝる梨出あかきとあのとこをうと歌く
あつあつ直うおあつやう一月机の下にひ先をり我
は比ま林何うく乳系男志力えくをり臨へ
得分とをんといふりあをたつあかおへえん寸
毎たりあははまきとらひのまを公上頼のふを
はくう我起ひくくそに名向考述を操あつり
阿く汝まをゆりり及及まもはる多しは後身完

春一

織子恐れあ梨といへと傍北商人老ゆり何能
己の先河んひまきふはまをいふを免すといハ
さのまやあまうけくくに教教後向集小
名身くあう山頂冬明和七ましきこゆり冬
十二月都者東山園崎の星己身虎の窓に
雪あまらに受束物くは蝶友川うり柳や

凡例

は集題の他例を考へ證句を志しん為たれど
古人の句を裁す中より古人の句の歌へ
あ類も歌の公たよりあつされ裁を今の凡例を
その歌の句の旨を裁すを裁す
四季の題は事並によき志しん御筆を裁しんを裁

類ひ裁りやうくちを増出并新く式古今抄
朽く春拾遺可くかを類集功業等の題を裁
考く題の取捨を裁す

四季の歌は中附句の用よりて歌句の歌あり
多く是を取捨す又四方辨公馬節今の歌
事の人此志しんを裁す花燈夕寒食の歌は
吳國の沙汰まゝを裁す昆沙門功德經のたふ
起り有るは今裁すり強く裁す事あるは

その姿情茂くきん載る
四季の歌に申詠社の神良法寺の法華の歌
悉く證句載奉るにむらりて遠支國の
事外に其名振と志きし載るた、東海あり
またあくる祭見及びひる歌菜種の御依鞍馬の代
等他國より二月迄のひら筑摩祭等の古く
ゆ及ひる歌一二名此例載奉る母地此余心
例載るるむ

四季の歌乃中生歌植物の類より古今より此
祭句なるに題詠を載せりて其句を志きし
後の人志ときあらん事をし
四季の歌の名目あり又小漢名字義をたき
事詠の歌より身ひ事俗談字話よりひて
教入山吹と云われ出たれり哉利也
四季の歌詠外に神祇釋教甚世帯述懐懷舊
羈旅名所等中其歌句あり先づ其の部と

新く附録す

此者の次や成つたもの事、句の好悪より、次
此の此者の時代と、かゝる事、こゝに、あつた事、
同時に、人、あつて、志、あつた

顔頤發句集春部

正月

蝶夢編

元日

元朝や非代の事も、おもハ、
事も木も、目出度、と、く、け、
終久、老人も、死つ、
元日や、何よ、た、
え、る、に、田、
元日や、家、
元日や、晴、

伊勢 守武
宗因
忠知
芭蕉
去来
嵐雪

春四
嵐雪

花の春

立春

初日

初節

初鳥

花の春 遠の春 陸子ゆき 花を交はり
 けりて 花の春 けりて 花の春
 春立ちくま 九日の花山より
 初日 初日 初日 初日
 初節 初節 初節 初節
 初鳥 初鳥 初鳥 初鳥

専吟 去来 許六 野坡 色蕉 任行 支考 可風 野坡 馬明

初爰

祇園初爰

年徳神

元方柳

門の雲

初爰 初爰 初爰 初爰
 祇園初爰 祇園初爰 祇園初爰 祇園初爰
 年徳神 年徳神 年徳神 年徳神
 元方柳 元方柳 元方柳 元方柳
 門の雲 門の雲 門の雲 門の雲

季吟 女室 百川 碧一 林亭 一峰 夕道 吻軒 去来 去芳

の竹
 嵩原
 標
 かきり縄
 のしり炭
 ぬら海老
 着水

松かきり架伊勢う家うふ入冬境
 ましくせやましくもましく川原外
 うふふ東雲まぬくそとれが
 由津新葉や次青う家の大かきり
 勢つけり糸代糸代わかきり縄
 かきり架縄や津代の直糸く丸の
 深山木や林原春よりうけり炭
 伴勢海老や赤うて先は殺さく
 ぬら水やましくぬらぬら水
 見うぬらや冬も薬子むしけり

其角
 嵐原
 順也
 立圃
 可全
 移伴
 眠魚
 玄梅
 武仙
 野披

大ゆく
 新煮
 嵩原
 鏡餅
 扇種

着水や走と玄ゆく筒井つ
 ぬら水や赤糸も遊りの志りぬら
 大ゆくぬら玄冬の新煮葉の白糸
 新煮葉や糸代の敷う花の白
 目か赤糸の縁も巻う新煮葉
 せうせう先子梅の志うむ白ひんれ
 嵩かこめ枝のむらこ七目出され
 先の敷う山ささくぬらか鏡餅
 へうけかた扇種あ先ぬらへ次青
 扇種うして小くひんれ娘の子

伊勢 乙由
 大和 山
 尾張 防川
 丹波 走く
 美濃 自悦
 加賀 知行
 尾張 北枝
 尾張 巳雀
 白戸 扇号
 白戸 立志

馬紫始
弓法免
松紫始
若衣始

昔そ先不柄杓の産乃十文字
糸初より下年あはるやの産
袋うらむも目録し弓法免
毎く老小雲り雪の孫り危
若衣始志の敏とも孫り先
母方産致免つりや若志始
福葉の産あつり一若衣始
と交わの彼乃敏や松とや
高砂や大お乳あつりひそ先
とれも乳葉の仕入そ汎世先

江戸 湯門
近江 木導
尾張 昌房
尾張 且葉
江戸 玄旨
伊勢 山蜂
伊勢 春波
京 今徳
南 高申
江戸 友之

高始
柳正
御初
免開
湯屋始
若解
至玉

初布や雪子湯斗の若葉形
と川市や葉も海方産り何
一と雪の公さく先や柳正
すれそ先や解ぬ氷を引起し
津吉のとれ実へと脱へ葉ひま
家子産り引出物せん花起死
月雪産るあし彼人初湯屋
初解下師走のときあう危
若解や晴葉のきて搦まあ
と玉り柳打り小節の舞り

伊勢 嵐
江戸 御故
伊勢 琴風
伊勢 雲木
京 立圃
出雲 琴風
尾張 和男
尾張 和木
京 巴靜
京 言水

万歳

太急務

鳥追

春駒

猿引

初葺

謎赤

少く玉の葉もあつた〜と歌の里
萬葉や遊も〜も欲知才
連て車て子も遊も〜万歳系
系威や丸おり〜起る松陰
誰か入る〜お福の非
鳥追や〜初秋す川志川
春駒や〜都の町も小春系
猿染り入る〜おま物〜
山も〜川系も〜太急務
長生とあ〜〜〜謎赤

宗陽

松蓋

一井

去来

飛明

松飛

巴靜

秋月

謎赤

ゆりく

手鞠

羽子振

やみ子

破魔弓

寶引

い紐つぎ

ゆりくやある〜流乳の枕小巻
振袖と行手に奉て手鞠うれ
と〜初やた子目出交〜替々
きり羽子やゆ〜悲志ぬ妹〜
やう〜とわあ〜女子交〜多女房
とゆきや乳母〜多流〜二人張
寶引り〜地牛の角状た〜く〜
宝引り〜夜〜藤ぬ敷の種〜乳
寶引り〜力〜あ〜〜ぬ巴〜との
編つぬや〜遠方の方〜枕せん

雲守

瓜舟

山嵐

刺牛

木導

松舎

其角

李由

雨音

朝休

御降
年男

水祝

子花白
小松引

若菜

おきくや十日の雨の降ち先
松の下幾千代々敷く男
や男子秋樂とおひしり
板の乃に解ひひまより水祝
おれよ女房おきん水しこひ
一生のこいひ保やあ祝ひ
あしり春と能者うん初子花白
食へもせぬお引り出り子の白
己々白鳥植く旅して小松引
菟菟よき小鳥賣く若菜が

暁山
重軌
弁原
春澄
其角
祇川
衣束
也有
白尼
造菜

一しとより一夜摘く萩う乳
七色子若菜つと出れきり
きよ若菜甘くも初子畑う乳
雪と畑く出あふおの菜が
摘れく踏付うる若菜が
芥か刈ふ端とこしと教言の尻
酸とて若菜つとへお言方
りうれおや鶴付おし足の時
情おしと摘も足へお若菜が
ゆれ縁や蘇古厚く土かう

山芳
楚水
浪化
踏通
惟然
万子
秋風
野水
嵐雪

蘇離

予くくくと雪付て来りぬ菜葉
ゆりぢくく水より七尋よりけり
此のふさあし此のふさあし
名菜つむ指の太さとあつ男
志め此まで此を頂へ雪のふさあし
七種やゆめより舞の杖の
こころりも歌は白へふさあし
鶏よりゆりゆりさきふさあし
今のこも此の蘇離たふさあし
七尋や留尋ゆりゆりの中

景道 乙由 希因 其考 一音 其考 伊賀 猿 我 北

蘇離

笑れくゆりゆりゆりゆりゆり
七くさや次もまたくゆりゆり
まれ板よきむし蘇離たふさあし
それゆりゆりゆりゆりゆり
水鶏ももきゆりゆりゆりゆり
蓋取くゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆり
と山家の江守てまゆりゆり
蓋ゆりゆりゆりゆりゆり
花咲て岩と危との春おし

景道 松陰 此 舟休 具示 圓入 貞位 宜石 其南

具足後用
左義長

綱引

小豆粥祝ふ

粥はしら

粥杖

節振舞

雲の内

嘗て或ち地へくくれと春おし

伊勢湯志の鏡ひまわ具足棧

ひのふたやたりとをま左義長

左義長や横電あてぬより

綱ひまわや巻まゆ一宗神の巻

正月後のちのくにぬや粥くら

かやはえよ迎ふりてうらみり

於此あたりに引物役や和田の巻

巻取く帯の朝日よ年よりり

京 風園

許六

季吟

我馬

冬柱

三敷

孟遠

京角

廿日月

御忌

木地の縁

敷入

壽考丸若と年まり松雲内

正月も廿日よりあまう新黄り

松崎崎身ゆきくへしは是の鏡

さうたぬ棧の書や御忌の手

梅笑く木地の縁縁の白うれ

巻又へや外合点して大系近

やかへやちたふく粥はら

敷入や灸まへまら敷あまろ

巻入の巻夜たのく又はり

巻又入りての巻ふく火焼り

近 鼓石

京 嵐雲

其談

玄高

素心

其角

京 里康

冷天

京 咫尺

連之

火子名茶

梅

口ろ子の入しくて来りしり
敬との花香の川木子の名茶は
梅のまりの川と日の出の山は
山里ある為軍連一越の花
なる川に枝のきけや梅の香
梅の花先を咲かしてあけぬ
行枝り脈やかよひく香の花
豎は咲横りつる梅の香
堂に口ききうさう梅の香
瘦して香にきく梅の香

抄中 沙文
かか 倚翠
芭蕉
其用
来山
支考
尚白
洛通
太来

月子立ちく正月とや一香の花
梅の香や火持と香のまき
立ちぬ木と古の梅の香
堂と小首の梅の香
堂一見一編梅の香
む光咲や川の野分れ枝の葉
くしくり咲梅の香と梅の花
枝ありは梅の香と梅の花
梅の香は月おろすおとや
暮るぬ人か鹿のやん鹿の

猿維
深菘
舎羅
汎舟
嵐雲
那坡
去芳
惟花
桃路

のみちほとのひて教さけ梅のそ
 栄知をのし乃隔や梅のそ乳
 梅のそおまよのめ系色分
 起免やか今里あらしの角
 枯か昔りこよ扱起免のそ乳
 久しとて障子ゆりう委方花
 何名我ま川を扱り梅の華
 寒若くともけはま笑や梅の花
 十八町舞より里何り梅のそ
 委笑や片扱をか死に枯あう

出所 岩川
信濃 曾良
左依 裁人
加賀 勺空
代古 代古
桃化 桃化
普九 普九
乙由 乙由
江戸 江戸
 扱居

柳

河之く歌覚懐とありや梅のそ
 委笑や何れ悔ても委冬春
 梅笑くゆ合な扱をかし危
 八九石空て雨あ歌柳り
 傘て柳分えきう柳の非
 死やんく懐りゆか委乳
 古風く不ぬぬれ志るく柳り
 己六本らて志と歌柳の乳
 風ありに志は雨ゆら香乳をら
 言の肯山と歌 老死こく

出所 嵐七
千代 千代
五筑 五筑
芭蕉 芭蕉
不角 不角
木因 木因
春来 春来
其角 其角
 与考

津水より月ゆるあはれは柳の乳
 傳くゆりく鳥の羽の素の那
 吹度と蝶の居直る柳の終
 柳の海を揺りく山を舞う乳
 引く色を放かひさる素は
 人志の中へ志を素形に
 海へ流ると日のあきらま柳の
 木元の眠りあきらま柳の那
 懐子二月のあきらま柳の乳
 川上へ流るやう乳を素に我

此節
 素就
 吟風
 形坡
 浪化
 文章
 一笑
 心弓
 由乎
 類波

風のゆく素然りしるの素は
 亦そのさきゆりく風の柳の乳
 又さくらをわたせしめる柳の
 係れわや素の陰かき素を
 水氷りたへは流る素の乳
 素直よふの流る素の乳
 一本もわたりさくら柳の那
 花さのめ方とまゆめら柳の
 柳てあとのひくを素に
 素素や二すく三節を素に

柳水
 牧寺
 小春
 蘆花
 江川
 三河
 松後
 助豊
 乙由
 木兒
 柳居

嫁ぐまじ

青柳や花きく木より扇し死
給方長くまきく遠く春の丸
きんゆりと水より漬る柳より
何と形く二月よ来し春の形
青柳やおまほり春の色
凍解りほつぬ暖や落のま
柳より乃る山の乾きや落の棠
その白く紙燭ほてもぬまれ棠
く紙巾にちぬきるれ嫁菜の
二葉より春のやまありまじ

希周 風之 文春 乙兒 秋瓜 米壹 柳坡 祖休 一守 一字

落の棠

寫菜

種子出さく小鶴やゆりま寫菜
くくく寫菜まおまのまのま
おのくくとまの京の水菜の

東流 馬六 尚ふ

芥

我事と鰯の函一根芥の
手より丸きとまのまの芥の
芥のやまのまのまの芥の

大草 奉白 十丈 乙語

水入菜

若菜よりまのまの根芥の
川流や淡哉やまのまの角
まのまのまのまの角

猿鉈 三惟

角くむ芦

くくあはれ不備は養育の極の又
黄もや味は枯葉と踏為し
くくひまの身と近うおそる
字久能あや葉の木畑を乾す夜
鶯や約のも啼こ世も暮る
くくひまやせしきま老く死
黄もや根根も老く毎の中
鶯や雀さやく聲も哀
くくあはれにむと息は胡乳
常はやつくく下りふ樹の花

色葉 荷子 牛角 文字 玄米 支考 木固 腫坡 山雲 北枝

春十九

鶯も老啼て無故く在合忌
鶯のひまいと出くも枯木は
黄もや此一葉も念致入より
あうりち直針れく初まは
くくひまの初まや今時のあまは
鶯もや不為禱去りおくも山を
黄もやあまもまても老くあはれ
くくひまや啼て無くもと支合忌
被妻もや谷のかくも花出間
はつそりと鶯もあはれ初まは

如行 斜嵐 利牛 高川 菅所 持花 十丈 伊勢 及朱 浪化 林お

百千鳥

鶯や加つ虫鳥皮へ越てり
くまのこのふしも替く初音
黄もやあそくも春の古うら
百千鳥都鳥あそ日あうら
川と冬あそ梅を百ちや架
鶯や此あそかおそ春の定
嘆やさえつるあそ水うらも
ふもやあへうあそ身と似のあ
あそ笑の餌り年あそあの池
白魚やあそさうは消ぬへ

鶯

童子

くま

黄

百千鳥

川

鶯

ふ

あ

白魚

水鳥

白魚

干鰯

輪 魚水 瀬 春風

白魚あ計さつらる鰯うら
白魚のあそあ白ひや枚のあ
ふもより價あそさうあそり
何れ鰯のあそあそあそ日あ
一升あかあそあそあそ
あそあそあそあそあそ
輪やあへかあそあそあそ
魚あそあそあそあそあそ
瀬のあそあそあそあそあそ
春風やあそあそあそあそ

白魚

白魚

白魚

白魚

白魚

白魚

白魚

白魚

白魚

白魚

雪解

春風や三保の松系法見寺
灸の点下ぬるも度は春の風
旋子の尾子春のゆく日影は
とろろとやゆの裾より松の音
唄高き旅人あはれ春の風
春水もや布子水きく小石系
あきくひのそ初めや春の風
雪のちちちちちちちちちちち
雪のちちちちちちちちちちち

鬼堂 許六 尚本 潘川 兼太 既白 春渚 康工 蝶後 作徳

雪汁

雪解や朝の刻木のちちちち
かきまわく雪解くも雪解く
雪とけて仲仲川流の来系
雪と解わるとれおと雪解系
雪汁や解いようは場中さ
候く下塔の雪もれ雪汁は
救起て畑を又さる雪汁は
雪のちちちちちちちちちち
雪のちちちちちちちちちち
雪のちちちちちちちちちち

水魚 春雨 曉春 系 伊原 木心 乙少 雪舟 涼菖 心秀 虚心

残雪

春雪

春も満ち雪よまきあけ舟も
是もまきくとして春の雪
春の雪雨かちよんぬる春
下筋の糸色とけきや春の雪
とけいふや梅の枝と下筋の
舟子板の筋とけり春の雪
侯雪や一つとけき春の雪
傘も雨く度や春の雪
凍ぬやとくそあけり梅の
雪もほろりと毎の氷の乳

城後 鶯

文考

一矢

李由

急日

吾仲

氣弾

已静

太若

小枝

凍解

水ぬるむ

凍とけや春の雪のゆき
舟子啼て氷の入りき氷の乳
春もよ水は流し河川に
舟子やゆきとけき春の雪
河川の小唄も出さぬ氷の
あけり雪は春の雪を折る
及りおきとけき水もぬる
舟子とけきとけき枯木も
春もぬるや春の雪も
春もぬるや春の雪も

一海

仙行

條若

己筑

軍賤

阿流

文水

秋風

芭蕉

言水

夜

詩履

孝望の妻や菜種や朝の比と
 舟の明て舟くまひくたかきまは
 案ふかた立枝もろや和履
 仲有帆の持こやこく夕かきと
 ありありふと暮らるる履うれ
 後波の立かろりてや釣る人
 帆張らる轆轤のしらや朝のそよ
 藤よりりの穴捲く宵のかけ
 夕暮りや岩を我を後と清くんか
 我も中名清と持りぬ夕暮りん

春九三

長閑

のびるよや海か〜ゆい海客よ必
 長閑きたわも心ぬ如く原く
 長閑さやまの張るも三ヶ一
 うらや田の中もろ海の水
 うらやあ如布も巻く仲の石
 長閑さ一さ〜〜あ〜〜磯乃乃
 舟のさや定よ〜〜舟も舟れ如
 長閑さや美よ〜〜舟も舟れ如
 あり〜〜あ〜〜舟の舟れ如
 暖〜〜あ〜〜舟れ如

近江 木節
 三河 杜園
 伊勢 利牛
 一有
 碩産
 長閑
 土境 菜丸
 藤原 雨竹
 高國
 秋風
 舟れ
 舟れ

暖

條寒

くまの行つりきりきり
獲るまことおれれ改申
彼存あさきき一夜あ
少古好ま目のあきあき
笑うけと物も能く解き
宵戸中あつたえりり田
法えいふれふれおる大
佐保非やゆふの西へい

支考
仙化
乙由
文豪
文豪
泥足
氣弾

二月

春九四

二日矣

ききり地や身あぢり子と押矣
親の悪考しぬ二日矣うり
ま山午や速くくして御戸用
初午や下向と酔く長老教
はつむや志を揚る赤の飯
ま山午や神宜よ化るる衣を履
所せよ古まぬく條の袂うり
釋奠や改むらふまその日ら
地ま山の地まらりぬる葉う形
傍拂の顔と宵らきりり

辺
千那
伊勢
志士
地坡
吾仲
山只
也育
其角
三子
信徳
鎌夏

初午

釋奠

薪の能

くまの行つりきりきり
獲るまことおれれ改申
彼存あさききき一夜あ
少古好ま目のあきあき
笑うけと物も能く解き
宵戸中あつたえりり田
法えいふれふれおる大
佐保非やゆふの西へい

支考
仙化
乙由
文豪
文豪
泥足
氣弾

二月老修法

暖哉抱松明

涅槃會

水とらやきりし佛の皆方も
吾けら若徒の水をのめと
松明や鶴松林のりきり
春のさうらに山風のふり
歎あゝ孔ふ顔あり種え像
涅槃と云や彼を命とて珠殺の言
孫子あやせふかき死涅槃
おれいふありき徳も涅槃像
乙入も涅槃と云く種え像
木仏も孫孫と云く涅槃と云く

色蕉
玄梅
方山
神明
季吟
芭蕉
伊賀 孫子
風女
己百
許六

春廿五

涅槃と云や片肌羅漢力外
神も凡像より有親かの子佛
有くく候よりして涅槃像
涅槃と云やされうと未だ日の光
大佛也横森と云くは御入裁
巻借り死きうひあり孫と凡像
手枕の樂と云くは如涅槃と云く
吾愛きうけ見や二月新え像
種と凡と云くは如涅槃と云く
涅槃と云や如涅槃と云く

若徒 樹松
五法 九次
出雲 寸く
言水
不至
乙由
木兒
五川
伊賀 入堂
伊賀 止弦

霜葉律御法
貝寄風
彼岸

念佛證
治聲雨
掩月

如霜葉律御法 如月之影のさし影さぬ由はこれ
貝寄風 貝ももやちとあつとらう 掩月
掩さくあつとらう 強説の彼岸より
何れは元々彼岸の入り又たり
之念の法辨しとらう 彼岸れ
うとらうとらう 花を深しとらう 人
う水 仏誦者 柳抄あり
治聲雨 雨の中 柳てま
何れとらう 様のある 柳てま
院并のとらう 引を 柳てま

秋鳥
車馬
支考
老黄
吾仲
丹後 季夏
嵐常
任法 友林
赤 志水
右根

梅の恋や 野村 墨老 掩月
夕風より 何れとらう 柳てま
梅並より 柳てま 柳てま
水風 鳥よ 夏より 掩月 柳てま
秋た 支考 友林 柳てま
葉の影 柳てま 柳てま 柳てま
妻の 柳てま 柳てま 柳てま
青雲も 柳てま 柳てま 柳てま
海棠の花 柳てま 柳てま 柳てま
何れとらう 柳てま 柳てま 柳てま

色燕
水枝
言水
支考
志水
高川
、
将終
外我
柳豊

鷗を名あふるる志まはげし
 指の夜や蝶の標本のる花
 何地へり水さきくに後月
 公の素志は格如おほくは
 物の多きとらるるは月
 登入んと花は袋や櫛つ
 志まらむより志の引く腫る
 帆柱のはる心も空や撞力
 六条より汐と焼く水たぬる月
 ちる花の言ゆもたや焼る

春波 梅路 可風 秋瓜
 春波 梅路 可風 秋瓜
 春波 梅路 可風 秋瓜
 春波 梅路 可風 秋瓜

春九七

出代

夕夕水は清く水さきく花の月
 登るれは思ふたてや後月
 出からや昔れをり物あはれ
 残屑や出らるる流のよの
 如らるの若れり掃や川の口
 出都るや猫うらむ人列を
 かうらるに圖司まの葛籠は
 出代りかたる如髪お踏んか
 布らるるや給仕志まらるる
 出かまらや家へてり古信案

采林 嵐雪 李由 木導 許六 朱松
 采林 嵐雪 李由 木導 許六 朱松
 采林 嵐雪 李由 木導 許六 朱松
 采林 嵐雪 李由 木導 許六 朱松

鷲化の姥と成
朝鷹
鷲尾鷲
仰り枝
仰り山
鳥の精

かげろかや川の海と鴉飽う
可帯ろくまの白ひや車道
功美や横り海しる所の桶
か帯海ふやテ物はく所鴉才
鷲化して花の代あり姥の巻
朝鷹や出ると戻るとふくり
さやあまの尾はけけと白尾
くしやくと星と枝折や仰り枝
あまの川あま月とあつ仰り山
言消く大声あく歌小なる乳

范字
普山
啞瓜
枝系
其友
貞位
飛水
鷄口
鷲尾
松露

卷廿九

鳥交
鳥の巢

特やすくふとあふ漢を先
つりたふ鳥や鷲たふ鳥の精
鳥とさくふ鳥や在とあつ一造化
春風りまきまぬ鳥を花う乳
糸柳葉より引くつるす先
鳥の巢や鷲の二つかか肩
飽くふと吹く恐ろし雉子の巻
何事のおおたふとさそ雉子の巻
おひ子とあつとら雉子の声

蕉笠
鳥房
為有
可吟
喜雨
廿月
芭蕉
涼菖
千那

遠處もひくけと旅子のほろろれ
ふりし北歌か旅子の誰の那
在の申も何はけり旅子の家
名もわきまふ旅子の名も
静もわきまふ旅子の名も
山の幅啼ひけり旅子の名も
若角よりわきまふ旅子の名も
吾も世とた一のわきまふ旅子の名も
何れもわきまふ旅子の名も
旅子の名もわきまふ旅子の名も

其角 玄来 入山 那坡 荻人 那明 岩虎 巴静

燕

秋のけは燕かへく旅子の名
かきまふ旅子の名も
旅子の名もわきまふ旅子の名も
旅子の名もわきまふ旅子の名も
旅子の名もわきまふ旅子の名も
旅子の名もわきまふ旅子の名も
旅子の名もわきまふ旅子の名も
旅子の名もわきまふ旅子の名も
旅子の名もわきまふ旅子の名も
旅子の名もわきまふ旅子の名も

淇園 十代 厨林 那明 岩虎 巴静 荻人 那坡 入山 其角 玄来

橋や子成昔の月の侍は
 乙名や田を焼くは古の跡
 か女や化粧の中や鬼つと先
 蕨や餅をうまうまて長き日
 山の畑にうま先をかか入の丸
 粟の中や文成細くは親つとめ
 炎出りたぐ紫の山乙名か
 乙名や粟の中は海女私結
 月夜もあつてゆく燦々丸
 玄名も何れもあつて中かへて

山姥 舎丸
 燈寺
 木導
 沢舟
 之角
 峯嵐
 嵐彈
 花の
 小春
 乙由

春世一

白鳥
 箱島
 松野
 帰雁

在の中は横もあつて燦々丸
 かいものよりあつては燦々那
 市野も表うう国つとえ丸
 暎やかうもは毒の顔とやう
 果やうやうは丸りゆき山
 鬼てまきみりうよへや松野
 子代や枝もあつて雲玉梨
 麦倉一丁と持ては丸丸
 ゆりくとゆりかきては小田の鳥
 帰る鳥あつては秋のやう丸

高島
 乙兒
 和中
 可枝
 曾良
 怪籠
 雨流
 野水
 涼菖
 文草

かく歌をよめりまき鳥と波のまき
 帰る鳥米つまむ古のやありふ
 夜通しに何れ油丁のこま歌が
 立まなく今や紀の鳥伊勢の丁
 たく立ちり麦の中よりかへる鳥
 何事と田螺よりかへる鳥
 順礼とくま交りし伊勢が
 きろくく鳥見る鳥かへる丁
 友喊く啼き鳥かへる鳥
 伴とく鳥かへる鳥

玄来 左角 浪化 伊勢 浮雄 荊口 子英 嵐電 朱拙 皇棠 岩中 岩書

春世二

雲雀

来るとりも目安な鳥かゆる鳥
 系中や拍もけんかへる鳥
 長を日かゆりたる鳥雀は
 啼く鳥風よけくひまの鳥
 夕雪も夜日歌進へる鳥
 風よ波よ鳥かへる鳥
 来雲とあへる鳥かへる鳥
 来又雀子とる鳥かへる鳥
 三日月と踏へる鳥かへる鳥
 秋の木かへる鳥かへる鳥

雀九 芭蕉 孤登 之石 憶登 女 如象 三子風 冰花

響

子やまゝにわきまをわすれぬ言なり
春風より力くくく子雲雀うれ
馬を物に引く馬の志をうけ
日中の喜に飛つるひよりり
仰向り度く見えぬのひよりり
夕むきて翌の日の残光をうけ
仰向り下りてくく雲雀が
氣をくくくく仕立ぬひよりり
中夜に夜よへぬれ電花うれ
花の言葉も響の歌も

秋風 秋水 李中 謙山 除風 乙南 杜桑 紀六 千代 山只

駒

花の子

蝶

駒を此花よりひり 若老上
春をいさむんや駒の歌
花子と知事かてん氣あ榮
人の状乃鳥追ひり花の子
春花や姉よりひり歌に楳
蝶舞くはる鳥物あひりれ
起らぬ我友よと人ぬら蝶
春をいさむんや蝶の歌
酒くさ人よかまらた蝶うれ
ぬまかへぬ蝶の歌の胡蝶が

その 沙為 芭蕉 免黄 櫻市 湖春 芭蕉 嵐葉 花電 乙羽

くらかへく麦の取やふ胡蝶が
 せまりてさ翅をうあくは蝶乳
 くらうらとちぢく飛ぬは蝶
 楊の子れんつほくまのこころ乳
 蝶くや死のうく日たやま
 蝶乳も昔まふまぬは蝶が
 死に下舞のたまふまてうら
 抱いそく花と中ら死胡蝶が
 道走り落て多つよく死のてう
 蝶くや志盗人とけりり

曾良
 柳青 任賢
 牛角
 比叟
 木田 出推
 重行
 柳若
 蓮之 口
 丁橋 口

春世四

蜂 紀

何の子そきひく蝶のま海が
 蝶くやけりあまは蝶く
 てうくやゆり出てまう雨うら
 蝶くや女子の道衣はやえ
 蝶くや折折はひは蝶若
 先へてて傘の上あふ胡蝶乳
 山吹よ何茂いらうく蝶のあ
 蝶の葉や一らくりり先若
 降み葉や留まるとふは蝶乳
 紀の目の何々悟りく子合息

己筑
 秋凡 江戸
 鳥明
 子代 未女
 琴之 漢書
 巨石
 魚日 永
 葉二 漢波
 杜洲
 反考

蛙

仰向し去りてりくや蛙の足
能の如き子の破きと尋る丸
石身ぬ公くううふかす川が
枯すころ今静る蛙の那
西の蛙あるりあるも衣く
菜の花は若くもよけてあく蛙
あかす蛙たう江乃里の敷
亭立く入相吹ぬかき川が
飛入るもさうあり蛙う丸
きろく蛙我類と蛙蛙う那

春舟五

嵐家

落格

李由

素世

涼亮

文草

名強

お花
去方

和歌の喧嘩も去んく蛙丸
夕々川流る戸は流系不蛙丸
蓬生りせ風常も蛙丸
田原妻くいも病れぬか川が
いまも骨をさる者あり丸
朝つく日宵中の光乾蛙丸那
弦持れ日残啼くは川が丸
川あり足手との丸蛙丸
傘強衣もり合も蛙丸丸
石川もあき流るか川丸

山珠
也

西吟

言水

北枝

去来

乙柳

乙由

菅本

貞佐

麻文

江戸
秋中

田螺

地虫出

蛙子

後夜の水さびらうに蛙う乳
 宵闇や爰に蛙乳となく蛙
 一虫葉虫まてゑも蛙の那
 立すれ水よ集りてかゝりけり
 けり子にうりまれこゝろつゝさ
 出川やとくくま蛙の子
 蛙子や何處へも蛙水の子
 けりまふやけりやけり
 ありまふ穴まふてや蛇の面
 つゝと泡ゆく蛙の田螺が

秋瓜 女毒
 風待 伝説
 鷲山 伝説
 粟里 伝説
 休亭 伝説
 砂陸
 鎌麦
 末山 丹後
 東陌
 四睡

春世六

飯銷 肥 初樹 鍾

仍身及子結あましう田あり
 系波うけ目我指ふ田螺う乳
 けりまの味をゆりけり田螺の那
 ありまると空ありまると田螺が
 滝ありけりまると田螺が
 けりまと田螺う乳ありま田螺が
 都人まると木まると人まると刀一把
 けりま田螺まると田螺う乳
 若館の中に肥うまると田螺
 飯銷ののをわあけりまると田螺

猿維 を角
 十丈 を後
 如作 を後
 心弦 伝説
 牛文 伝説
 曾北
 蓮堂 伝説
 春寄 伝説
 末山

猫の恋

飯糰魚や八道の恋乃立ぬも
猫の素電の崩もさう通ひも
呼切り事そとくもわ猫の恋
猫のこ念能の貝やかと野の
此このこひお手う呼そ表こ
あ方う舞う有く猫中も
うたあうたてや猫の望も
うばりかきまう猫のほり
二三日内中形は此こ恋
日南少と居のすうぬ猫恋

怪烈
芭蕉
太来
香如
神坡
末山
支考
尚公
舎死
免黄

そや免は出せぬ猫中も
猫のこひ電も雨にあま
あまのあ猫のこ中おま
うも海舟のこ猫のこ
かうくも素は呼く猫中も
猫の恋位く飯を喰より
飛もさくあつあやと神の
朝の素もあ猫のこ
床おまのあもあ猫の恋
猫のこ念能あ人ま

孤舟
琴丸
秋老
裁人
車番
反朱
林取
免士
嵐七
丈石

さし木
接木
苗代

多の海小橋多道よりいば宛
一軒一ちちや日ううの赤橋
今あるとまも蓋方長つもたれ
はつとく水兒のむきなる出木
さし木も直形も折しりし
乃とふれ花おきすし接木
餘の葉れとやあつ下つ接木
苗代を兄とある森の鳥乳
お逸る細のあきし苗代田
苗代やうれ款もあつ蛙

利牛
公来
近江 巨沙
尾張 舟泉
一笑
凡雪
加賀 芦丸
又考
許六

春四十

晴ぬて
水口祭
種下

苗代や東寺の塔お水うみ
かりりや仁王のやれ足の如
苗代すいせとあ水のまこと
苗代の色接よがれ青と乳
苗代や踏んとまも踏み
苗代や旅うたにるる早の教
晴ぬてや美ゆりまも海と川
晴ぬてや湖の水引とまけ
小魚まきあつ水口あつりれ
種下し俵りりも小橋ど

近江 朱迪
種坡
子英
幽泉
土佐 表石
子母
佐渡 前口
武蔵 文竿
榊儿
尾張 舟角

種うー
種前

種芋

畑打

種漬く湯はくはる種川少
種加や太神宮へ一付のこ
麻前や道二癖の付女も
種まねる磨の外下雨まに
た子芋や花のさくら枝葉わら
種芋や植女はえうく芽々え
種くもえんく畑の男う乳
ゆりと敷淋の克りや雲の種
畑ももつれ分の帯や川白
こく打や野うく志質の如人

京 辨石
土前 冬角
伊前 曉雨
民古
武前 芭蕉
吟風
太未
秋之坊
加賀 乃露

焼野

すくろ為

山焼

のひ家

胡葱

葱の葉

青打のはれ先や小田の荒をに
いさや小松の孫系焼種少
名はし焼種は根や風の束
こやくはまきく吹出た焼種か
雨さしや去年のまくらの子みくら
山焼く岩おまみくら星りり
山焼や路り入日の焼種り
焼や丸敷地うく土のひ家
あま川まき打まゆれら白乳
徳の事七一夜寐より葱の葉

江前 意程
伊前 左木
武前 猿轡
筑前 呼丁
水乳
魚日
異花
伊前 那明
伊前 汀茅
伊前 本残

より車
菊紫
菊英
菜の花

物春の薨りあり新蔵うれ
仙人の墓に指さして蔵
子蔵や笠とら山衣抱り
とつら城高の梅より清き
瓜あやより朝も新海紅
たんぼやまをとり下まへて
教子や鏡も一きり鏡より
せん海やふあゝとく伸り
菜の花や流もあつとふ水
かおむや一本咲く松の下

先雪
盛吉
正秀
兼山
志山
秋瓜
萬志
雲麻
言水
宗岡

大根の花

菜の花や小窓より出づり
たつたれや枚菜の去りのるに
菜の花や戸口よりけり
菜のむやあよむも乾屋の持
かおむや赫奕とてちひ
たのたや小家の隣にや
菜のむの在旁より入日
かのもやまよほりてあ
菜のたれや鼻のくま
踏たつたをあらよふ

史邦
長缸
嵐馬
敬業
押居
以之
淡々
玄武
傑
乃毫

三月

上この言

照れ柳ゆきハ表の言句なり

方山

一日鳥挑あふはきき都丸

寧陀

曲水

曲水や筆の流る御海水

角上

川下て亭の盃あき先きり

兼笠

曲水や岩よ三河組又ころも

希因

曲水より桂流る山路りれ

大光

雛とくそ雛ひまきりり雛の歌

之角

雛の振宮儀ハ海しきり

之角

雛

卷四五

春風より二かた子雛の駕は元

菽子

元の子は餅とまやうも雛は

如行

姉妹 肩掛流るぬと雛の駕

斜嶺

若柳よりたまは雛の屏風が

風國

振舞や下座はあやうき子の雛

去来

雛の口飯つふ針くそまきり

天和

雛立ちく馬よたると娘の子

了ん

氣より入る一使きり雛まきり

嵐洞

あつて及申ふくは雛はれ

許紅

あつて男せうと女や雛ひ那

乙兒

草の餅

柳うゝ
折太刀
鷲合

常力名来てはあらん草の餅
摘こまふ杵をさしつゝ蓬餅
原氏強の身ハ形や草の白
草餅や草の白を交し地面白
草の白や虎を交し付こらる
地面白くはる色も青く草の餅
みまゝの多草うつらも顔つ支
君はげや孫は結し折太刀
鷲力名獅子は傲く逆毛ハ
順礼をさしはよぬや鷲あハセ

嵐雲
乙由
近江 八通
理然
馬六
糸 七噓
但馬 乙柳
糸 一桂
之角

春四十六

汐干

猪あもへんに若くはせり合
衣く子孫を恨まら鷲あハセ
赤ハの白又佐のとくく鷲合
青赤の尻よきくく汐干ハ
う帆の淡路もあれぬ湖干ハ
駕籠ありて淡路へのん汐干ハ
海風多松よあうてきぬハハ
三日月や汐干よもその色ハ朱
きくくハハの汐干や田植櫻
帯海と大川のなるき銀干ハハ

奉白
婆公
若生
芭蕉
去来
如泉
楓林
木周
久我
佑徳

急うと鳥出地へ見て驚くは三が
 彩田はあつち中しく志願ひんれ
 乃ちもあま松系志を敢て下り
 入る物のかゝくともゆの御下り
 念浪のくより追新志願ひんれ
 善くともあつちへくは下り
 魂とう法海もきれて去後の海
 雲波のりりあまもや壬生念佛
 ちれ念の回向もあつち壬生念佛
 梅摺の香らきまつちり吸義の毛

近 比木
近 奉白
 乃露
筑 兔士
佐 若雨
印 仙李
永 揚川
世 太祇
世 菊二
 白扇

去後の海
 壬生念佛
 御身拭

峯入
 永交日

峯入あ言も子難の旅路り
 峰入や款志先針ら懐中包に
 永交日や子よにあつて夕馬
 かゝる包や仲志先木のよりの馬
 撒法中包衣れあつちる日の也と
 永交日や清く心も善く
 永交日や懐こつれは川海田の橋
 かゝる包や仲志先木のよりの皮
 長あつちやなつれ次身の飲あま
 若借く尺もはほし春のこれ

宗 宗因
世 去芳
世 道春
 神水
 許六
 上枝
 朱迪
 素丸
 文意
 阿誰

春の日

永文日や今時の芳地も雲の裏
春の白雲を佛ゆる花地も
さるれや葉の末留ま小法師
春のりやあきあき出ても昔は
ゆけりれ表あきくと春の雨
春雨や竹の葉つとふ根の偏
物にハま子の花とらや春あき
春雨やうらうらと這入る石灯籠
さる雨やぬきぬき海の夜鳥の穴
春の雨や火燧を卵へ是と出

下冊 松路
尚念
正秀
見死加賀
玄音
芭蕉
荊口
秋風
文章
末山

春雨

月花の目眩や目眩を春の予
はるああうらうらあんど次りれ
せうくと海空へり春のあき
さる雨や春の公女がくれ里
あひさうと霞あき春の雨
傘と出りけりけりや春の雨
横りけり公直さやさるの春見
柔子近交を織りり春の雨
春雨や葉も枯れり春の雨
春の山も古きあきと春の雨

支考
を角
一笑
友元
木道
向空
林外
乙由
相之か賀
季布哉平

春四六

別業

春雨や四葉己葉のやり木履
用帳の湯よむ日くも歌のあめ
鈴子さうらめぬあふ春の雨
春のや出はへ事ていふも言
一日冬内は飛くとや春の雨
歌うも眠さそらや春の雨
高し歌をくも火焼と寒うさ
く病まつら歌をまのふり

北俱かぢ 素風
杜菱
千代紀伊 抱花
文芝陸奥
出舟 蝶友
惟中
調歌
子那

田舎鳥成

郭公の業

若菜

鳥帰る

雲合

麦熟

呼子名

唄うり海と色の見ゆらうと
けり麦成業う歌くやねあ
若菜と若菜と若菜の如
麦のひも去かえうた友を
鳥かか歌をやそ若を
鳥雲う餅さう一人の川
雲に鳥行式見せく遠入
秋の麦入くや啼かぬ麦
呼子名と種よ出ぬ麦熟
深山路や何と帰へて呼子名

入芝
茂秋
北枝
木高紀伊
苔峨
之角
朱拙
万子
已静陸奥
万流

櫻調 樓貞

上巳梁 若館

櫻くく力 柳の家重

美の境何やまのうね子為
毛くま第たういそれもを
彼の志ちうてや磯のさう貝
ちうころや石の補のむさう
櫻調笑りまきよくしつ金一
一廻り櫻くく力と嘆せりり
美の水は秋の木は象と柳籠
あまももあまの葉重うれ
あまれあまの競ひわう梁
あましくあましくはく小館の如

三子風
西鶴
休夜
素世
琴風
廉吹
嵐雪
翠樹
青尚
圃水

春五十一

汲帖

垢塞

菓子

館の子れんすはまーは薩のま
あ館あ館の一本雨りたうぬ
儼壺り今あこむ小館うれ
ち敷急やうもに汲く小あや
くく館や枚りひうと入日敷
あ亭まもい巻りうはの名館
伊塞のうのまーたやまを
嬉我あまうくはあへてや梅の巻
垢塞やまのう巻節館重
蟹ま敷あま古代のまうとん

去芳
才磨
為有
东伴
為仙
楓休
万子
圓入
意程
曾良

葉摘

若和布

你及やら申上取とる蚕り乳
麻て起る喰ててこまれ葉子が
下筋の造りくこく琴強の那
青くさく蚕飼の家結子海くら
三月や冬の糸色の葉一本
桑はこや畑の丈とくもさる
葉つや枝り夕日のあうさる
糸和布儀支法名砂まてと
乙惟のあく和布裁百まへら
一雨冬和布り思む日如る

若和布 味雨
若和布 青雨
若和布 露也
若和布 文系
若和布 子川
若和布 蝶麦
若和布 翠糸
若和布 涼菴
若和布 一布
若和布 春呈

桃 浮世初

う梨子や赤くもまふせ所
起りくと白糸を糸 柳の忌
餅喰及旅人おがくもお花
念柳や糸も扇走水もと
麻の種毎年ゆする 柳の忌
楽さけくつりよ出くや桃の花
大鳥遊て家より外 桃おむ
日守路と思ふて事や柳の忌
垣杭りいさき柳の咲り亀
柳さくや畑の机乃鏡さく先

浮世初 少波
浮世初 木固
浮世初 支考
浮世初 柳隣
浮世初 利牛
浮世初 涼菴
浮世初 荒弾
浮世初 飛坡
浮世初 苔本
浮世初 乙守

花

かろし家や松の権りつた花、
鶯の居たり数りつ桃の花
大雪の上まきく赤い松乃花
雪の居たりぬやうりものむ
花をけくく松の林う那
一僕とほりくありく花んが
花ちりくく松雪う松かしの
ふあ架て大のそくぬ里と分
花山やゆりてそや松出所
咲うにんかつふ松の敷うん

春北
春波
十磨
文彦
信徳
季分
重軌
常矩
我黒
気黄

花のそ待きと種を浅子
系信も花んのをき七松傍
勢ひよりり種人も松んが
うり追く松のりりやきく入
花ちやふ交既枝付き合を
立松の張り多きやふの中
竹鹿も松よかけら花松引
啄木も松木法んや松年
花咲も松引うげ松木ん
雪のそわくは松も交へく

芭蕉
那坡
涼菴
松来
丈草
木良
野水

花子死かろく来てあけ酒の泡
我妻のうらもあつたさき
羽風と云ふはあま村うら
花の音やあまのひらき
春草の揺さくはあまの
あつたあまのあまのあ
あつたあまのあまのあ
あつたあまのあまのあ
あつたあまのあまのあ

嵐雲 智月 正秀 許六 半残 氷花 史邦 秋風 青垂

春五十三

かろく来てあけ酒の泡
一本杖と云ふはあまの
あつたあまのあまのあ
あつたあまのあまのあ
あつたあまのあまのあ
あつたあまのあまのあ
あつたあまのあまのあ
あつたあまのあまのあ

特効 浪化 暮四 了ん 友尚 雨青 晚山 开七 巴風 春仲

梅

日侍らばやひさしく見ゆる山の
花さゆきの木陰よあゆむ向
ひを打て人亦たせん山ささ
木の葉も八けり松もほろろ乳
みえぬやきく日暮の山梅
起りにさる飛鳥もあけらや梅
明星や梅さきと先ぬ山さ
並葉有りともひくの梅も乳
そらけりさきみへ此一を梅
名の分ぬはかきゆー山ささ

素丸
荷登
一飲
芭蕉
来山
心直
冬角
去芳
晚山
湖春

春山

高きなりそく枝ありんち梅
梅さくや於る牛乳白ひき
そらけりや飛鳥もあけら
ゆく教く刀る人梅も山梅
風俗の園守ありん山ささ
我嘆く梅一飲くを戸梅
一枝ありぬるもさく山梅
伐口或人の井起や山梅
山さく飛鳥後よと戸梅
らん物と笑ひ山ささ梅

丈子
酒巻
不卜
一有
北枝
支考
尚云
徐寅
弥子
乙中

遅梅

舟行きの道も山さくら
やま梅何処通つとも免罪
月へ入る人の春戸もや遅梅
光る山梅も山梅
さくらも山梅も山梅
万日の人をちりてや遅梅
ちりてや遅梅も遅梅
遅梅のおくも遅梅も遅梅
遅梅も遅梅も遅梅

雷小
免士
希因
麻又
涼苑
加賀 室角
朝守
伊勢 榮年
英仙
か 宗中

春五十五

梨花

とそりしき道もつち梅
若木にも一思葉あり遅梅
志れも遅梅も遅梅
志の身も遅梅も遅梅
梨花も遅梅も遅梅
遅梅のへく遅梅も遅梅
曲らぬ枝も遅梅も遅梅
かゝるや遅梅も遅梅
遅梅も遅梅も遅梅
遅梅も遅梅も遅梅

志 五筑
九夕
許六
支考
吾仲
以友
録友
永 重頼
希因
尾張 普宗

海棠

海棠も遅梅も遅梅
海棠も遅梅も遅梅
海棠も遅梅も遅梅
海棠も遅梅も遅梅
海棠も遅梅も遅梅

幸夷

躑躅

海棠や高採らうも為今を
かゝるやお粉ふ粉もそのう
死ななくて崩るゑるあつた
凡そも久くを幸夷のむろ
咲立く采のあめや躑躅山
初うに女松生さうつて
去馬乳埃砂あり躑躅が
山名やはけい尾のひめ
山まゆに花咲うめうつて
日の園と哉るも昔ぬ躑躅が

這平 枕山 巴水 羽長 又草 尚白 伊賀 狐休 捺丸 荷弓 希因

春五夫

山次

香久山は伊達が抱えつて
山名はや宇治の嬉炉の白う
山名はわ垣はほくさ養一重
香るゆきや又冬あおと園の上
山次やあにひささうとけ
山名やたえく落ふ花の水
やまゆたや病換洗ふ里の川
山名はわ末の蒼のひくま
香ゆあおや秋あつて秋の戻は
山次や漱はくそもはくそ

後山 宇冠 色蕉 園指 三何 白雲 怪松 半残 向空 了ん 枕化 希因

木瓜花

山如木也何所り咲てる春のう
山如木也敷きつたうと白敷

可掩 茂 乙筑

沉下花

砂川やまよしとけり木瓜のふ
物老の应て焼く如く白敷花

鑑賢 純伴 若文

木蓮花

木蓮花紙分は我咲りりり
木蓮花ちぬ先を衣衣

尚白 子那

赤南志

仙卷萩

庭梅

仙卷萩大宮人あいつにふ
赤南志人あも人をとて衣さら

踏山 徳九

春五十七

あぢのむ

葛防の花

杏の花

李の花

小糸花

桜の花

連翹

馬酔木花

織作も侍とく花さくまの
赤防の何れも杏の花の色

希因

如くのもややくまのの 一かま

貞位

李さくあや氣衣もあこまの

翠路

外物も花をとりてく小糸花

山夕

名も持て塚り桜も咲りり

湖春

連翹や赤く枝り山吹と

麦由

まの翹や柳も芽もあつたか

芳妍

約もも子調ひんか何せも花

令法
柿の花

山里や旅のあはれ令法めー
唯の時多は先く今更柿のふ
枝のふ蔭を今更ふり
人より求る人者す外柿の葉

日向 糖雨
其か 伯免
助實
文素

忍ひぬ

接年

九輪子

夏

吹流しよも分はさらく車
忍びりあふ依蔭や九輪子
九輪子一ア人あふあふ
子外く者うれあふあふ
笠の端はあふあふあふ

描丁 素束
其後 伊茂
遠実 里桂
近江 色蕉
捺志
春共六

風吹くく静るくく夏の花
穀畔や種麦よそく藤花も
く人あふよ一培をわぬあの花
葡萄よりあふあふ夏の花
藤の花あふあふあふ
えとらや地すや松よ夏の花
葉の万葉分て下るや藤の花
夏の花あふくあふあふ
はとく年いけとや夏の花
白藤やあふあふあふ

秋風
前口
白豆
伊勢 柴友
其か 雨村
其後 謹考
其か 雲森
其か 巴静
其か 巴人

桑椹
春菊
金錢花
水端草

松の戸焚くやけり桑の
葉葉や根をさすは出づ
想ひ可きもあはれなれば

嵐井
布舟
松路

粟植

たぐの草を忘れぬと植はり

尾張
生林

二月の月夜に植へる粟の
葉苗より衣係り去る乃莖
植のゆきくや二日のゆひ
女房志くゆめをさす
つゆらの杖をぬきゆれ

二月の月夜に植へる粟の
葉苗より衣係り去る乃莖
植のゆきくや二日のゆひ
女房志くゆめをさす
つゆらの杖をぬきゆれ

糸
肅山
伊賀
朋水
氷園
為林
曹北

春六

三葉芥
蕪鬘
丁子芥
青麦

席杖や阿波の内侍の
赤靴の能走りあつた三葉芥
二葉とら白ひきとら三葉とら
幼ひり花野うらな蕪鬘
糸花と起るひきとらや蕪鬘
坊くたれもさぬり丁子芥
と葉あひよれ青麦の麦の尻
葉種とらぬれぬり麦の尻
青麦や海州支園の於新
麦青く初ぬきの葉あは

伊賀
赤馬
二葉
一葉
蕪鬘
寸馬
仙化
丹七
呂舟
吾茶

三月大根

三月菜

金鳳花

とまり草

狗脊

芙蓉

若荷竹

春山

大根花の三月も

あまのさへ三つ大根花も

あまのさの中うまう三月菜

北鑑

可憐

鬼録

狗脊の笠帽子ゆく日如乳

芙蓉や種の後の方より

は草も何り肥とそ若荷竹

玉椀の挿根り数やゆく牛

蝶も先へりまらや春山

正秀

伊原 文泉

村江

芙蓉

文考

春六十一

春野

春の暮

男が一夜寝てらん春の山

半坊く泳あがりや春山

醜味あはは春の神子と女

女さへ一そ肩ゆく春野

木瓜あさし境して石と花

春のやい月この手にかりん

春梅のうらさきあは春の暮

飯ひひり春の山夜半春の暮

あまのさの置はれ春のうら

花とては残屑や春の暮

近江 有環

伊原 許六

岩野

山居

羽衣

山居

山居

山居

山居

山居

早春

ひ春はあけのふとけり
ゆく春に夜のみあきらむ
ゆく春に情をうつくし
山吹のまはるるを
ひ春はあけのふとけり
ひ春はあけのふとけり
春はあけのふとけり
ゆく春に夜のみあきらむ
ゆく春に情をうつくし

芭蕉
支考
山川
松妖
文字
卯水
李由
林如
魚心
流字

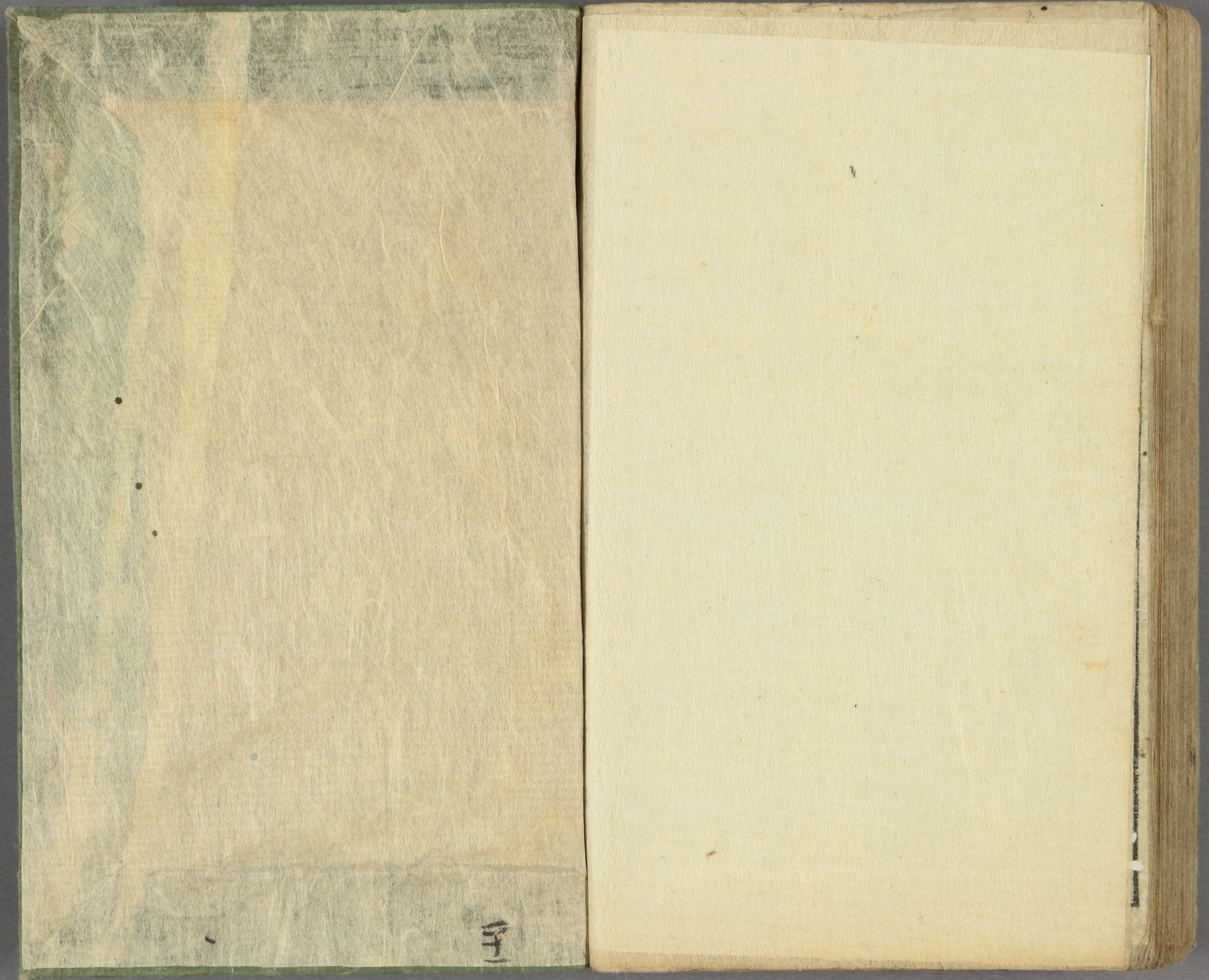
春六十二

三月 巻

くしゆくも春のうき
口癖のうきも春のうき
ひ春はあけのふとけり
ゆく春に夜のみあきらむ
ゆく春に情をうつくし
山吹のまはるるを
ひ春はあけのふとけり
ひ春はあけのふとけり
春はあけのふとけり
ゆく春に夜のみあきらむ
ゆく春に情をうつくし

宗瑞
淡
也
文園
山
松
松
松
松
松

三月と文よ書のも名孫う乳
春もまふ糸のかまうらわれ中
次之
千代八千代下如由やけまの表
那七山七日やなせやけまの表



151

